

清 3  
981  
5





忠孝比王傳卷之五

第十五回

權兵衛詐欺誘王江狼谷

養拙菴主人著



去、東江、祇園會の折から、俠士少く、困めらるゝ其場を逃さ  
 歸らざる、鯉、敵と寤、小舟の百折千磨、八常の支るの思ひ  
 居けるが、王江は頃不圖、熱氣の往來ありて、不快、業、  
 り、是、医師を頼み、治療を請くるに、虚病うつふ、おそむ、落付  
 け、是、ど、看病の者、と備、障、あ、ま、日、ハ、東、家、共、其、敷  
 茶、等、の、世、活、と、ま、く、間、日、ハ、如、例、久、平、と、地、方、久、京、所、の  
 所、く、彷徨、ま、し、ける、一、日、東、西、陣、の、方、へ、出、ける、は、晝、已、時、頃





西箇の橋夫一張の竹兜と昇來門と音いんは玉江  
應て何と云ふ越えさるやと問へば橋夫我等ハ辻駕の者  
うろが藤の木に廻り備えよと云ふ。這所の内亭が先  
刻途中ふて病氣づつ其甚苦痛する弊多町方の衆ガ  
立合種々茶よど子へらるまで大病と云へ真事も身存不遂  
よこなりぬ保よ今眷と喚寄せしと町野と名おれし  
俣衆皆相談の上急よ我ホと頼みとこれど肝心の姓名を  
忘却するも多其野這所よて岐漸は表の菜舗ふく尋  
當りりと話せば玉江ハ打驚き原來ハ去年東海道の旅  
中あて痛風と患ま一づの再發やしぬひん去と今

朝ハ西陣の方へ行と波うろが兎まは角まは急病とあ  
ま記掛久平が帰らも待難しと其戻途の竹兜よ素り  
藤の交へと急ぎけるえは橋夫ハ大鷹権兵衛よ憑きれ  
まろし者どももろ。曩日祇園よて誼誂の折くら権兵衛  
つからあてと見く隠よ隈まり下立瓜菜舗の裏は家なる夏  
と知り潜よ近隣ニ探をねみ並ける去ハは頃玉江が瘧を  
患てまよと委く知つと留守と窺ひ束が途中よて病氣なる  
よと云ふ玉江と偽つと惹かせしり。然るよは日妙満寺の  
在ま戒淨坊閑東うろ親教師へ茶を冒贈つとむらせんと  
身自宇治の里と志し既ハ根谷よて來らまろと途中の



騷雨は擾るく道の傍より禿倉へ入ると一駒憩居らまはけれ  
 ど猶雨降止まざればや腕と扱は一覺と催しけるは何ら  
 表の方より竊く人の説話を聴くも戒浄坊怪しむ  
 さし足して物陰より窺へば不曾思東が仇讎言ふる東馬  
 軍治と四十許の蠢蠢する男と共に禿倉の椽先より腰打  
 かけ説話する成るまじ戒浄坊猶きき耳をて睨ふとも  
 知らず彼男東馬に對の如何は先生我妙計と云ふつるや  
 最早時刻あまは程なく這所へ連來るべし那厮極便よ  
 行は幸甚先生の懸念せし女もまば我亦嫌し先生よの娘  
 娶へし若まこひは從ふんば解て連歸を困戸へ掛て

花柳へ活つるもせん那厮もつとも豔癖する代價るれば  
 極めて五十金や七十金より成るまじ亦のつるは紙園新  
 地の扱負は供せんと微笑ば東馬喜悅誠は公が今般の  
 秘計妙算驚き入ると以上の彼東めも術を以て返り討は  
 し以來扱と高やして睡るべしと説話折らら前面前より一  
 張の竹兜飛がどくよ昇來つとが三人首振り目撃して  
 去來其方が此亭の這所は病て居らるるりと云つて竹  
 兜と扛居まば玉江のいまで京師の地理は孰まま何れ  
 藤の末らうや知られども遠道跡絶て數町竹藪の  
 野らうは怪み思ひろがら竹兜の内より立出まば東馬



近づき如何し戀人我と見ぬやと。あつうとよまどし  
 戯言に王江の思ふ事師とて驚きさるがらも力を集へ  
 汝ハ辱る泰山の敵是もて難言と報えんと千草が苦盡  
 せしよ今日は何まで此邊へこそ不審る事と云せも  
 思ふ調笑東が病氣と偽り其方と云つて野は連糸ハ  
 我々が討象最早汝が房主も最時途申して返り討よ  
 志まば。今この氣と改め我むは從うと一生何の不自由  
 むく安樂して暮さすべし若しと云ふが汝も這野  
 ちて刀の錆と大刀さりと引脱て嚇かかまばおび  
 愈つゝの泪と流し原水ハ悪人亦が詐計よ汝入しよる

去はと畜生と見汝が意は從うと云ふ。殺さば殺せ  
 太刀さりとす泰山の敵覚悟せよと護身刀拔り早く衝  
 掛まば東馬も刀取直し嗚呼也と人ちまば推兵衛隔を  
 せぬ。是奴生身で行へらば併殺すも可惜の去來  
 引郷連歸ると傾城は賣へると用意の早繩取れ已よ  
 斯くし見くけり呀不意申秀倉の中も鐘の如き大音  
 みて奸賊亦其呀動べらりとおぼしめさる戒津坊明星の  
 如き眼怒らし彼の禪杖と打振跳で出る轡夫亦一齊  
 に左右へ薙倒せ其衆皆驚駭周章と味方を頼まば  
 兵衛軍治よと掛まば戒津坊もやとやく成しと禪杖を

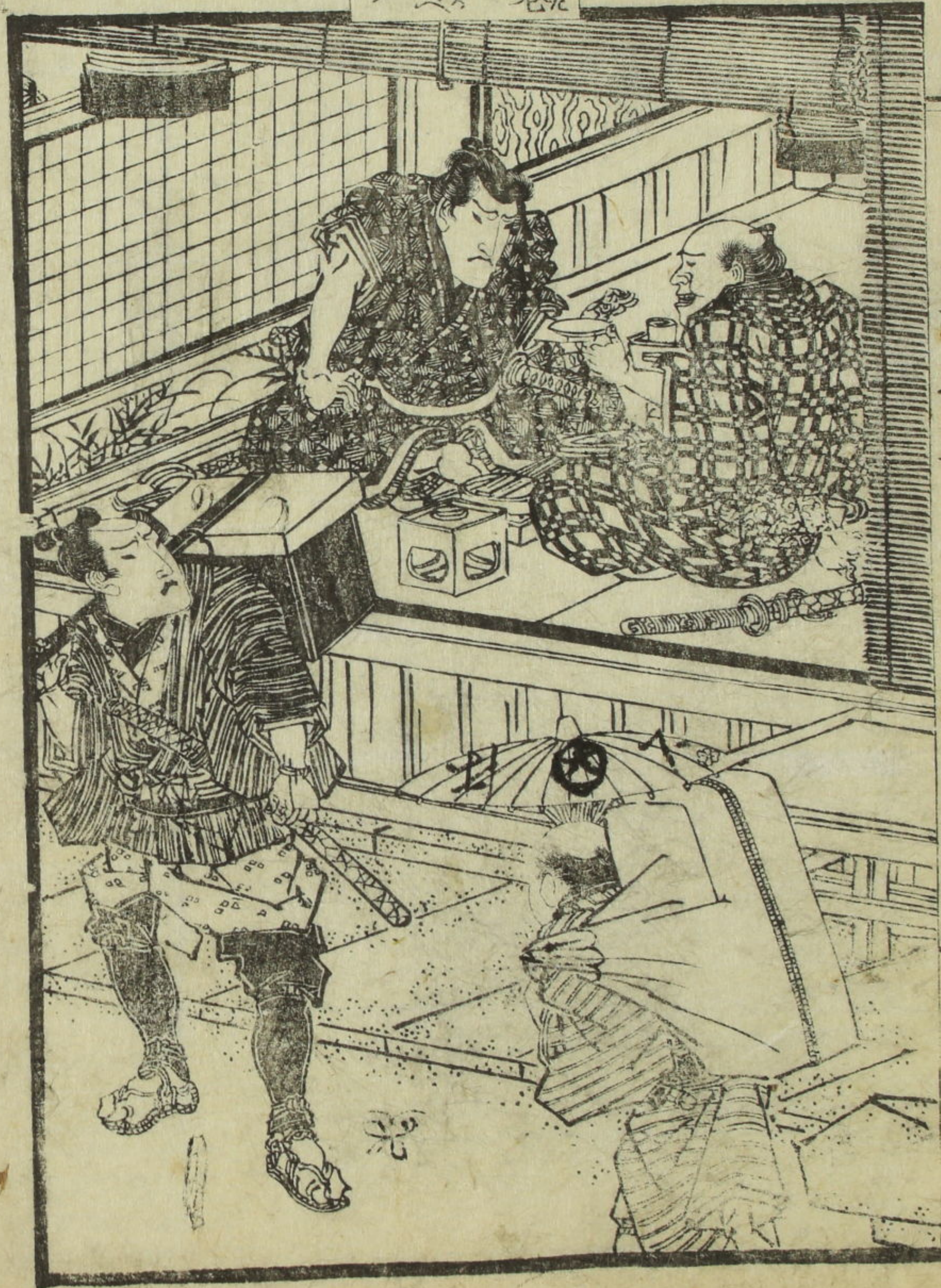




五之五

五

四之卷  
 の再  
 道野  
 出す



五卷之五



水車の如く遊蕩せむ。兩人共く避易く一編より狼  
狽す。東馬ハ豫て日行が不通の力量知ると云ふ。折悪く  
思へども差當り後の仇と踏込で一刀むのガ喝切下す。ハ  
母と一妻倒ると見向も非ず逸散る傍への林へ逃とる。ハ  
南無三塗と戒浄坊。韋駄天の如く駆行ひま悪徒ハ何と  
命辛く行なす。志す成るる。戒浄坊ハ東馬が跡四五丁  
計追掛し終つて姿と見失ひけむ。大地と踏で齒嚙と  
る。嘆口氣師の誠と守りて故郷響應る。當の敵を取  
逃せし後悔もがらむ。王江が疵記掛し立戻つて挫  
抱き馬さぐりの水手に掛し口は會で吹掛し息吹

四辺と見師ハ如何して這所へ来りぬ。ひいと問ふ。戒浄  
坊ハ頓づから不審ゆつとも我先程は所は雨病し。不圖  
彼ホが詳計と知るといふ。あゝ平生捕て立帰らんと思ひし  
師の戒と守りし且其方が多疵よ。誓死しぬ。悪徒を捕逃  
せしぞ残念。念うま。去れ其方取て多疵ハ負さう。やと云へ  
玉江ら心付き酒家も最前より負うらと思ひし。よ力又善  
う死ぞ不測のま。ハア是とのやも思ふ。故郷をわらう。時渡野  
村の日夜上人さぬの酒は必よのらう。一壽星品一断もは力を  
離さる奇特ありと懐中より取らるがごとく如何。是すて  
完き一軸の半截断有けむ。あはは。徑文の酒家ががらむ。昔

水車

六



のひい。と戒師諸ともども合せ佛徳の有るを死とぞ感ふす。  
 良有して戒淨坊浩る夏有しとも知らず宿少てハ東等  
 さぞう。苦勞し有ぬ。片時も早くかへらんと玉江を告げ  
 肩つても堀川さして戻るとなる東久平ハ其目も共ニ黄合て  
 宿所へ帰るとありしが家内そこ爰取散らし玉江が足さ  
 不審しく如何の夏有けるを取。案じ居ける所戒  
 淨坊の玉江を伴の立歸今日の仔細と詰る。二人共  
 且驚き且喜び猶上入し。一軸の不測のわざを感  
 歎す。戒淨坊東は對の雙言敵已は洛中ハ潜居る。紛ら  
 以上ハおも油斷らるべからず。念を慮便は方便と誓て

計らんと其より堀川の雙言敵後所を知つて。そを所を  
 引拂ひ戒師と憑み先督く三糸妙満寺小ぞ居り。

第十六回 二兇畏罪竊逃京師

却説東馬推兵衛ホハ誑て玉江を狼谷へ惹寄せ。戒淨坊  
 障らと謀計のつらざると本意う。思へど先ハ兼く  
 意の遺越ある玉江は深疾肩せけ。寤めて存命有へ  
 からずとむよと湯か。尚東とも哄て返つ。討る。已  
 京都の後居心身くつ子。西漢ホハ付囁東が下立の  
 病所と窺。せける。既にそを所と。居る。け。び。六  
 地。彼等と。總次。通同て。印。仕掛。て。



べーと言合せ其より所々の往來の氣をつけ東等と驚き  
 けるうち夏も早くて空は暑氣の残きとも盆よりぞ秋ら  
 衣はよりよりける早晩都城も魂然る時として辻小路の草  
 市は公は供る瓜茄子芋虎蓮の葉まで賣歩く姿の速  
 ろる中おも心狭き鉄鉢を捧て閑が氣門くま立  
 僧布囊と掛て喘ながら東西に駆走る丐兒の族何は貪欲  
 ろる世界よりくるは夕推兵衛東馬は對の先生年々く廻  
 来る精霊會も氣盛きころり公はのやと都城の盆  
 踊ハハのハさるべく去來今より河原へ納涼ならま移ひ  
 踊観行んとあま東馬のくる夫ハ有趣かるべさう

小子今宵は何とも身体悪寒ありて風と畏とほま残念  
 から糸の難し各ハ我ハ構はず観観は初め左あらは徒  
 然とも留守しと入りと軍治も共ハ園家うち連病をぬ  
 ける東馬は日何とく心鬱悶して樂はず燈下は假寐  
 一居るける実了時を感じて花も涙と涙と別と恨ん  
 てハ鳥も心を驚かすともや斬逆く飛秋の堂床隔は啼く  
 蟋蟀の物哀はさうら風と過來方の夏と思ひ知り我身は時  
 壯年の短きは短き累世厚恩の主君と後小ハ父母の墳墓を  
 棄本國越前と立退きと後岡東へ流宕し上総土氣の坂  
 井原は仕へ幸食録は有つさけるが武道の幸幸はより儻



友藤代平内と殺害せしも今思ふに不使するまじき。是と云も  
我孤ふして師父の教らるる懶惰は成長せしむるものけり。是  
獨でちるがら寝てさうくくと睡つとける枕下さも吹くもの  
ふて東馬くくと二言呼びけるを覺へ目と悟し今喚ゆる  
あそこのか藤代平内なる音なりけり。直に刀おのり  
膝立まば敵地一團の火氣溢く。と燃上りける不敵の東馬  
就裏逃免す。礮と切まばる應じて落けるを寄せて熟見  
まば靈棚の前より掛る蓮花燈なりけり。まば公落つて我今  
賢不快して氣の收斂せま。公の疑ひもろて暗鬼と生  
けるるり。まや大夫夫ひとくび悪及ま墮入ると重飛ハ犯す

とも怪し毒喰うと血と紙と何ぞ今更先非と悔まきはよ六跡  
我と寛ぶ族と辱む返す結よ。再び大國へは官し者の  
榮耀と極めんと。慨然として居る所へ衆皆帰ると来りける東  
馬権兵衛と對い父恰終我が睡つとけるうち如何し。まや。  
佛前の燈籠へ火移すと。燈落つと。と云へば権兵衛も笑ひ  
夫の風の強く吹當ける。但し嵐のつづらよ燈の奴咄断  
たるるるべし。と構ひま。去ば流酒よ又も一献酌んと。ま  
奥へ入まける。諺よ云千両八百十三年奢る者久しからず東馬  
権兵衛も。琳曲よ。時へ金銀逆て入。逆て知る理。早晩  
そこまら。遺滅し。今ハ已等が舊押る花嬢の揚代は窮す。



呼彼所へ揺る樹歩ゆも度重し十計つき後くハ絶  
 一呼へ出掠奪強盗しつゝはる遠き終は狗の着る管應へ  
 達しけしむ賊曹隨即収兵と引領大鷹が四条の空へ搦捕し  
 向ひける折ら三人ハ居合せ推兵衛が妻子分もと集め  
 後堂に酒臭狼籍厨紙牌あて居りける所収去以命也  
 と喚つて出入る衆皆周章逃出ると逃路跡らず辨りけしむと  
 東馬ホッパル人さるる妻と妻と差違拷問しぬ推兵衛が妻  
 固く思漢は連係女とさ始のやいらく詐し陳しけれ  
 目目前兒子の苦患とせしめ賊曹は對し稟道何と隠し  
 さん三人の者どもハ祇園新地大和屋とせしる娼樓は旧狎の

危儀あつても最早彼所は抵りいと招業はかびる去ら  
 直る捕人と推兵衛が妻子子房ホッパル隣伍は預けをさるる  
 祇園とさして駆行けるゆゑも妻が云へる遠くは彼  
 亦既新地の大和屋は本り樓宴の上坐し推兵衛偃々  
 胡坐かの花の井は酒斟せ東馬軍次も各配妓は寄居ひ  
 封函歌妓と共に謡つ舞の良よ入て居りる収兵衛は度  
 婆は明き障子の透間よりを動靜と窺ひて突て三兒は  
 擬うりるに賊曹左右は指揮し豫て東馬ハ劍法の覺  
 入るるゝ容易にせは錯過せんも計を凝しと壁燈繁景の  
 如く点ト捍捧五股又よて家の前後をまゝ一齊に鐵火



振く段階と駈上りて賊徒逃さしと圖待て敵妓了髪ハ  
 連托燥擾顛倒て泣哀めど東馬ハ偵自徒とことば公内  
 と言傳よ爽削前より火盆を名向の収兵よ投付さぬ刀と  
 脱て横衝直撞よ切辨ひ焦燥て歩擲へおろと見へしが亮  
 藩と蹴破りて外面へ脱まば軍次も續て躍出闇夜と僥幸  
 兩人ハ屋根と傳ひよ走りしが透と見候し閃と跳下り  
 何国ともなく逃去ぬ権兵衛ハ月の肥満より上御大醉  
 りりけまば狼狽爛動見よるる去ど巴が力量と頼み  
 須更収兵と結極しが決きて倒さるるを衆多しと捕ぬ  
 賊曹二賊と逃せしと之趣東西と搜索ども終より集む

ござん権兵衛のみ繩紐帳野へ引獄屋へとそ下りける斯  
 て東馬軍次ハ奇くして其場と逃さしけりとも四糸の宅  
 へも帰ると難く竊は黨類する悪棍の方ハ探居とけり  
 入口は権兵衛が拷問は堪はず悪更つて招養よおひける  
 してはさき斯てハ巴亦が罷料も免るべからずと軍次東  
 馬は對の仲も今よりハ京師の住居ハあつるべからず只く  
 差早他国へ逃んよ如どとて入木東馬我も左とそ思へ去り  
 らざらん今何国へ抵んよもさき當りて路費よ多しけり  
 遠き旅ゆはるのりぐり思惟よ近江の佐々木弾正義賢  
 とて因富専ら兵法と好と圖が先彼野へ去越身と寄へ





五卷之五



戒浄坊  
不意  
五江  
すま

五卷之五



其の就き先日松原の商家へ貨物を入くるかの雪村が馬  
 の一軸幸い宝の身のさのさ一合せ何国として沽却とも縁の  
 金子は成物るまゝ今夜彼所へ行き詐欺て奪ひ去て  
 後共よ京都と区命せんと云へて軍次氏も最終へしと  
 それ暮と待眺歩く松原の商家は抵つと土結子對の  
 先日當家へ貨物を入置置獄の一軸請ひ一度と未だり  
 あまの主管兼ると七庫へ入ると程く画軸持来ると東  
 馬さ一寄るとの請取は巻軸今宵或商家の隠居へ金  
 子三十兩の賣遣りす約束しとて、今持来し金子請  
 取て後利とも借と勘定のことすへとおまの主管兼る

無理成仰るり我も辱は限らず何所の貨物もとえ  
 利請取しされば候令は少の貨物なりとも號一やあ  
 是のたよりは多計の寛恕一下さるべしと巻軸取戻し  
 と野うまを拂ひ退け東馬いきまはあらく怒まは顔  
 色小て口と天さるる。何ぞ武士たる者も虚言や做  
 すまじく少同借呉りてかへと主管否くかざりて相  
 成りさすや尚一抽と取返んと立寄り東馬嘆息吐  
 らた愚人の言さる主管が諸賄羅に仰は衝倒せ  
 園宅慌張を漂せぬま一落草を扱兒と喚りる勢と取  
 小も入まは巻軸と奪ひ取兩人外面へ馳去りか去向



ぞ成ふけり

作者曰東馬が心身困寂し氣の衰ゆる時我と我奮  
來の悪友と悔けるそ彼が奸曲のほつりも入と稟る  
所の明德掩ふべからず猶時として發見するものなり。  
若其心と擴充ハ別人故と退けて善公は歸ると速よ名  
其非と改ると終つて亦其黨と共に凶悪を増す噫  
愚るるかな

第十七回

象頭山神廟東等感靈驗

備も東ふ仇人既の京都は徒黨のこは無慮るべからず

と少頃其動靜と窺んこめ妙満寺の竊び居こりける。四  
条河原の突徒大鷹推し流盜賊せし夏露の捕と東馬  
軍次る者ハ其場より逐電しぬと既推兵衛ハ飛科  
極ると象首せらる妻子女の浴外へ退放のこり巷説有けよバ  
原來ハ兩人とも其が同類るると疑ふ。然るに彼赤公の老老  
食談と志を京師ハハハハハ。最早他国へ逃去つらめ。され  
ハ今より何と踪跡ハ尋ねべきと。護り合らる東戒師  
に對ハ警嚴ハ越前の産らるり。と主君ハ其命せし者  
るまバ本國ハ歸るべからず。又東國ハ敵ある中よりして討に  
土氣の主入へ起さあまは是より下り難るべし。但西國へヤ



越つらんといふを久平仰せたまふも彼日頃かの権きつ  
 と共々、按奥賭変へ長ト岸へ一金浪ハ遣ひるく、  
 盗賊せし由るとハ急劇の遠行ハ必路費ハ結つて成中、  
 祇園の花娘ハ深く旧神とて定めて京師ハ留戀の手  
 近國ハ聚居へきり差當つて亦何國と尋ねたぐべき小子思惟  
 讃岐國金毘羅推現とて靈驗極新として天下舉て尊信  
 する神とてハ先彼地ハ我偏ハ推現の冥助を祈らるる  
 仇人の行糸鼻等、夏有ヤンと云へ東諾我とて明暮  
 ハ神と尊信するところ、彼地ハ諸國より系指羣聚し  
 繁昌の津とてあるまじく、仇人は環會夏も有ぬべし

戒師頼りながら如何にも神明の利益誦べらるる讃岐へ詣ん  
 夏あつるべし去と渠奴固つて剛強曲者るまじく必後行由断  
 うつ心と配する人と訓まじくさらば後波へ登程すべしと再  
 後行の烟波とて戒浄坊ハ別まつて妙満寺とて京師  
 と離れ伏見より乗合船の枕枕も蓬漏る雨のふせせれよ  
 暫しの夢も澄び得ず夜と共に淀川と下つて其腰斗よ  
 浪華の八軒家より着くは舟より上つて浦辺に抵り後波への  
 通船よりの景進風の順風穏よ洋々たる五十餘里の海上  
 二夜と歴て後波の九亀よ着岸する実よまじく増つて  
 諸國より推現系指の舟船入船家居の賑ひ大方うま



陸地百丁の道と裁へ即象頭山金毘羅推現の宮居よ  
 抵つてつゝ各神前へ額づき願ふ又神石側の加護  
 ありて吾儕よかと添へ速よ雙敵よ相遇易く報雙言  
 さしめぬ入と一心よ祈念し其より祠壇よ七日の通夜  
 二ける其曉むるの神前忽地鳴動し光明赫奕と輝き  
 渡る中より髪髻烈しきひきまて過兵庫遇奇人入水失  
 出山獲と高らりよ咬へけま各奇異の思ひとす。信  
 心肝よ銘どつ神急の程と感れあへの夜曙けまいさ  
 や示現よ任せんと勇みて共よ社とわ又丸亀より参り船  
 一浪路と行くも瞻望の播磨浮空よ烟このち藤

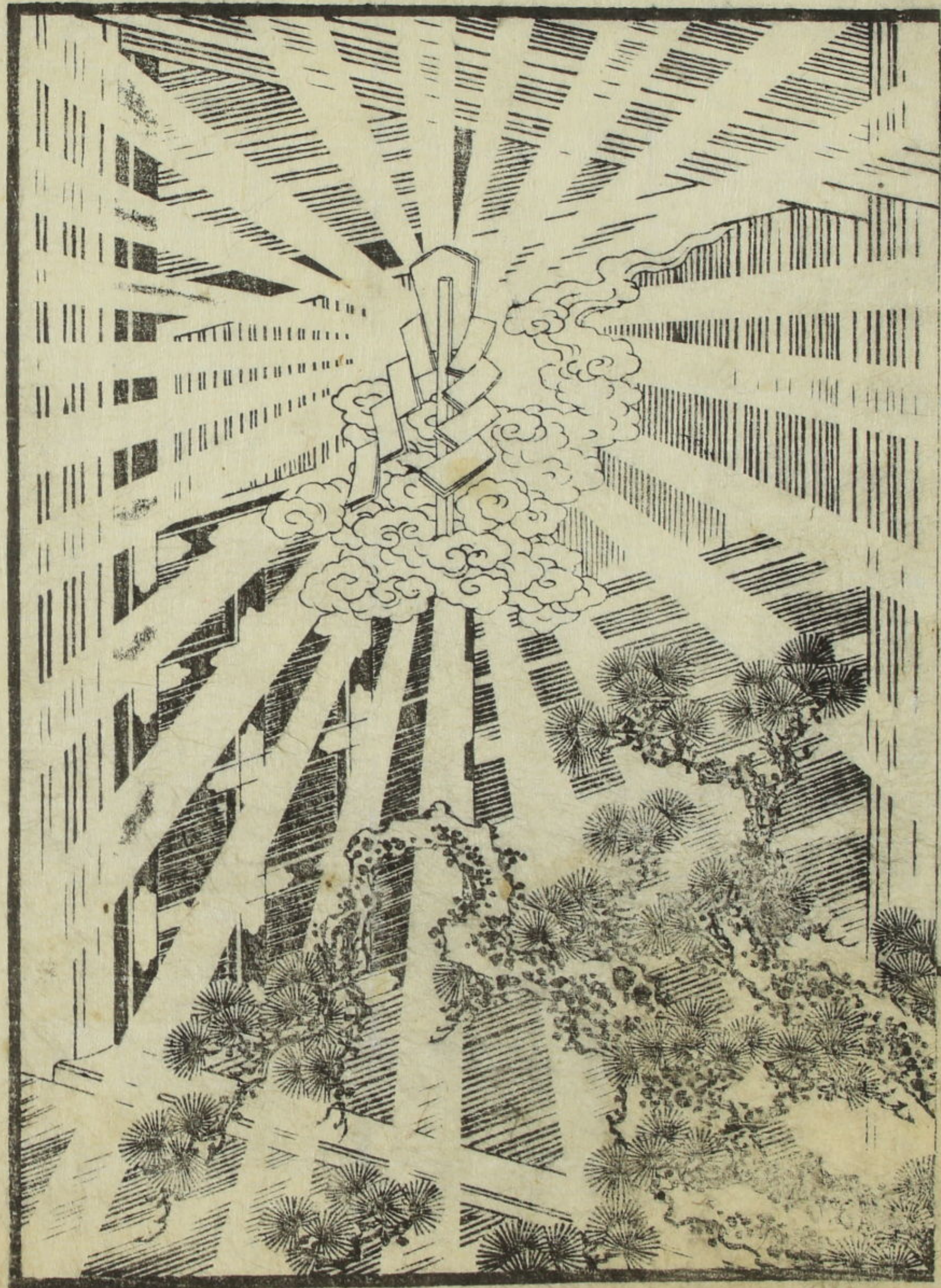
ハ藻塩焼ろつ赤穂の浦倦ぬ泳めの鳴ぐも是より陸地と  
 行ろたむと空の津一船着さ存る姫路よ掛る乃すぐら  
 石の方殿と拜礼し誰がも枕や曾根の松古昔延喜の頃  
 かとよ天満神の左僊一植ひひぬる名木と咬とあ際  
 お寄る浪の鼓の鼓くくと音ものも有越さ舞子の涙の  
 風景よ旅の労とと忘るつゝ名も高妙の松が根の茶店  
 一駒一憩ひつて曉うけてと旅どけん屋上の鐘の由来を  
 尋ね沖と眺望は淡路島通ふ千鳥の交ぐも須磨の園  
 路の隔つて明石と出て行船の隠るまでぞおしりて  
 見返る方よ聳る仙術のしらで翱翔得ぬ揚が峯鴨越





五

五



五

五



ひう一壽永の戦い平家の兵十万余勢擁籠りて皇居の  
断荆棘のみぞりて茂くは推致我苗の程とるりけるぞ是れ  
空もろ死せ也けりこと往夏と感ずや暫し及の是れは  
まよと傍より石塔一行り入の香花を取ぞ夫の公子敷  
盛の冥福と今より吊ふりるる、聖衆を催され急げと及  
のちどらちが測りてよとくと兵庫の町は着しける

第十八回 兵庫旅亭東廻道画工雪村

萍水相逢盡是他郷の客とや、櫻洲兵庫の浦ハ昔時平  
清盛海岸数十町と理め新し淡と徑營一都と遷しりる  
福原の舊跡として萬國廻船の輻湊する所去ハ高麗の繁

昌旅亭の賑ひ他邦は起過し。世は兵庫の築港と喚び実  
相國の功績さらぬ、宿も東むのき日の黄昏たつりよと兵庫  
の町は着けしが旅亭は先宿とよとめ、かく客廳は放寛前  
面の方縁に居りたる折らら。とよも旅客と入る門は音の  
者あり、其の関東より西國へ罷る者つり萬望一宿と仰  
下さるべしとあるる、房主立出此ころ容易きより當座  
公方の山腹にまじり入の旅客ハ止宿す、きず氣の毒もあら  
是より町と難し農家よるほど、このみかどののしとせげら  
き辞ふとよの迷惑する夏より最早暮るく、間も有る  
如何のせん、とや暫し躊躇して居りける、東客廳より



此辭と見誰とてても獨旅ハ憂もの。と。まゝて房主と對し  
関東ハ何所の人か知らぬとも彼人を見らるゝ別は仔細も  
うた方とこそ見るも固吾儕も関東者能令のらるる夏あり  
迎も後証より成中へ。あはれ病とかりあはれやと有る  
房主はしら病とやべ。去來は方へ入らまよと云へば旅  
人の雀躍喜びの宿なき仕合と採先は腰あけ草鞋解き  
すて脚洗ひ同く客廳へ通つてけろ。其人年甲耳順は逆さ  
双髪よて目眸清く眉毛長く身は思き直撥と著け千よ  
一箇の鐵如意と持優妙なる光急ハ自ら長者の形相あり  
かて東よ對の今夕止宿。難きいせしよ各の芳意と以て

此所は宿アヤせしと。過分の至よいと。幾つまが東且の町噂  
るるは挨拶維も旅人の同く夏まよて。関東の四方と兼こり  
るるうらも存いある房主は。辞派ヤせしむる。宿失殺  
ふらひぬとも。此四身や夏あり。先主の関東よて。何国の四方  
にや去ば不佞ハ常陸の産らるる。馬の師範らるる者之く  
西國は在せども。是まよて文通のまよて。未だ面識や。さるる  
は及諸国遊歴止る。獨り西國へ越さいと。又谷は東。其面体  
操の。眇つあう。君ハ常陸の画工。雪村先生は。非ざるや。と  
問へ。其人不審顔。あて如何。よも不佞。雪村らるる。足下は  
志てまよて。不佞が名を知らるる。仰たよの。小子ハ上。慈土氣の



藩中藤代平内が陣中とや若しの先年先生上念へ掛ひの  
 時主人坂井定隆先生なる名画の誉あつたを尊師雪舟大明  
 師にて画さるる富嶽の圖の模寫と望み申せし時小子一日  
 父平内と共に画席より伺度し幼年より先生の容貌面  
 體微よん賞へばまの諾上総の國土氣よて城主の器の  
 應り富嶽の模寫せし時塩梅藤代平内より入し謁せし  
 事あり其令嗣よていしや原末まゝに足下當國へ來るとし  
 記の去ばい其後安房の里見家より聴及た富嶽の圖  
 一見のこ一度し使者是あつたより家父君命を奉り右  
 の画抽房州へ持來の拍より僚友平山東馬よりもの劔術

比試の遺恨よりの黨と語らぬ途申よて我父と殺生し画  
 軸并よ若干の金子奪ひ取逐電のこいも多き憤りの堪ふ  
 巴々雙言報仕度即主人へ願ひと上管領より赦文と奉り  
 既の暇とや交是迄搜し系置りと語らば雪村一盞茶時を  
 拱て居りし東よ對い尊大人の敢る物故季細美り  
 驚入内法念理より其仇敵の居野大野の如きやこのと  
 云へば各お殺り死雪村が前了摺寄て君如何して五條が昇る  
 雙言敵の去向知つたもの去い本月の始不佞近江州佐々木氏の  
 城下観音寺の町と過り市上の董舖より彼富嶽の画抽  
 掛念り不佞を思ひを寄て其由と及すは曩時よ



何まの所の纏はるるや兩人來つて官途の身の圖存んこめは巻  
拙活却るたの夏固つて画圖の珍奇なるゆへ餘計の金銀にて  
買受りぬ其後右の入達當城へ仕官し只今八家中へ武官の  
師範として居らるるやと云ふ其仇人の當時佐々木氏は仕へ  
居るゝ相違有まじと語るが東雀躍し噫値遇時あり実よ  
神あり程ありと云ふに吾倫向ふ京師よて偶仇人は遇ひ  
志が彼亦別るる悪言又露破し都下より難く其後何國へ逃  
失りや終よ去向知まざるといふ以上八咫角神慮を假るゝ如  
おこ今般吾倫常々信仰しなる讚岐州金毘羅権現詣て  
神前より祈誓し七日通夜の曉過兵庫遇奇人入水头出山



獲と崇き神の示現は假せ昨日當所より來りて不図君の邊  
奉つし讐敵の居野知つてやと偏に推現擁護の奇將又いふは  
恩惠とて説話ハ雪村とて拍て斯く神明の導き有からん本  
望遂らまんと疑ひるゝ必也と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
久平玉江も共くは天も登る心解して喜ひ勇て理する其より東  
亦八雲村は對い是れを呼ぶの旅は長々艱難苦行せし説話にて  
後禱を共よして禱するの夜曙は今ぞ目出度首途あり  
いざや牙の賤別せんとい胸杯酒酌交しやて関東よて再會  
やべと各東西は袂と別ちけり

子比王傳卷之五終





